

# いのちの水

二〇一七年

十二月号

六八二号

マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は、自分の民を罪から救うからである。(マタイ1の21)

## 目次

- ・冬の訪れ 1
- ・キリストが来られた三つの目的―マタイ福音書より 2
- ・内なるもし火 4
- ・共同体としてのエクレシア 5
- ・突き放されたところからの叫びと祈り―詩篇60 6
- ・星の世界 9
- ・お知らせ 集案案内 10



### 冬の訪れと春への希望

冬の訪れの時期となった。木々の多くは冬の厳しさに耐えられずに葉を落とし、かれたようになる。

人生にも冬がある。ガンの末期やさまざまの重い病気や災害、事故、そして、大きな罪を犯してしまったとき、他人からの攻撃や誤解、裏切り等々、そして最後の冬の厳しさというべき老年があり、その老年にこうした災害や病気等々がふりかかってくる。さらにその厳しさはひどくなる。なかには、死に至るまで、家族もよく健康に恵まれるという状況にある人もいるかもしれない。

しかし、多くは、人生の晩年には、厳しい冬―体だけでな

く心も枯れていくような状況に陥ることも多い。

寒さゆえに、流れる水さえも凍る。

同様に、人生の厳しい冬にあつては、それまで行動的であった人も、その働きは止まる。

それだけでなく、そのような活動的にかつ周囲にいろいろな働き働きのした人でも、病苦や老齢ゆえに判断は弱まり、生きていくのがやっとという状況となつて、心まで冷えていくと思われる状況にもなる。

人の愛を受けられず、心のかには冷たい雨が降るといふようなことも生じる。

しかし、それにもかかわらず、必ず冬のあとには、春が来る。枯れたようになり、死んでしまったような木々も新たな命

の息吹がきざす春がくるのは、必然である。

同様に、私たちの人生の冬がいかに厳しくあろうとも、必ず春がくる。

使徒パウロも、そのことを次のように告白している。

：兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失った。

わたしたちとしては死の宣告を受けた思いであつた。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになった。

神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救つてくださったし、また今後も救つてくださる。これからも救つてくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。(コリント1の

どんなに冬の時代が長いと思われ、これは終わりがないーと感じて、たとえようなく悲しみに襲われるときーそれでも、そこに静かな細き声で語りかけてくださる。

この冬は必ず終わり、いのちに満ちた春が訪れること、しかも今度の春は、永遠であり、自分の側から捨てることがない完全な状態として残っている。

春には初々しい新芽が現れ、花開いていく。

私たちも厳しい人生の冬の時代を越えて、新しい天と地にあって、キリストと同じような御姿に変えてくださると約束されている。

キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる。(ピリピ

### キリストが来られた三つの目的

1 マタイ福音書の最初の部分から

クリスマス、それは、キリストが地上に来てくださったことを記念し、感謝する日である。

キリストは何のために、地上にこられたのか、それはすでに旧約聖書から指し示され、新約聖書全体にわたってそのことが記されている。

ここでは、クリスマスを迎えて、イエスの誕生のことが記されているマタイ福音書の第一章に記されていることから学びたい。

最初に記されているのは、聖霊のはたらきの重要性を示すこと、聖霊を与えるためにこられたことである。

マリアは聖霊によってみこ

もった。この記述により、人類の救い主の誕生は聖霊の働きによるのが最初から記されている。

そして、そのイエスが30歳になつて福音伝道にすべてをかけたようとするとき、そのさきがけとして現れた預言者、洗礼のヨハネは、つぎのように言った。

私は水で洗礼をする。しかし、私のあとからこられるイエスは、聖霊と火によって洗礼を授ける。(マタイ福音書3の11)

火ーそれは聖霊が愛や真実を本質としつつ、燃えるような情熱を与えるということでもあり、悪の力を焼き尽くす力をともなっていることも象徴的に示すものである。

そして、じっさいに大工としての仕事を父親とともにして、それらをすべてにおいて、福音伝道の道に入るとき、イエスが洗礼を受けたときに注がれ

たのは、聖霊であつた。

サタンに誘惑され、試みを受けたときも、聖霊によって導かれ、悪魔の攻撃に勝利されたことが記されている。(マタイ4の1、ルカ4の1)

そして、初めて伝道をはじめたときも、イエスは聖霊の力に満ちてガリラヤに帰り、そこで福音を伝え始めたこと記されている。(ルカ4の14)

さらに、最初に自分が育ったナザレのまちの会堂で、教えたとときも、つぎのようであつた。

主の霊が私の上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私を使わされたのは、捕らわれている人を解放し、見えない人を見えるようにし、圧迫されている人を自由にするためである」という、旧約聖書のイザヤ書からの引用から教えられた。

ここにも、聖なる霊がそうしたイエスの行動の根源にある

ことが、すでに旧約聖書から  
予言されていたのである。

また、キリストが十字架で殺  
され、しかし復活したキリス  
トが、40日間使徒たちに現れ  
多くのことを教えた。そして  
そのたくさんの教えのなかか  
ら、ただ一つのことが使徒言  
行録に記されている。

それは、つぎのことである。

ヨハネは水で洗礼を受けた  
が、あなた方はまもなく聖霊  
による洗礼を受けられる。

(使徒言行録1の5)

このように、40日ものあいだ  
に語ったことのなかからとく  
に一つ選ばれた言葉が、聖霊  
を授けるということであつた。

使徒たちは、キリストの逮捕  
のさいに逃げてしまつて、イ  
エスのことなどまつたく知ら  
ないというひどい裏切りの言  
葉を吐いて逃げてしまったの  
ち、キリストの愛によって立  
ち返り、約束された聖霊を受  
けるべく、待ち続けるように  
との命令を受けた。そしてみ

んなで祈り続けていて、与え  
られたのが聖霊であつた。

その聖霊によって、弟子たち  
はそれまでの恐れおののいて  
いた臆病な状態(ヨハネ20の  
19)から一新され、キリスト  
の福音を命がけて世界に伝え  
ていく大いなる出発点となつ  
たのである。

そして、イエスが十字架で処  
刑される前夜の最後の夕食の  
ときに、語られた約束、遺言  
というべきことは、自分はこ  
の世から去つていく、しかし、  
かわりに、聖霊がこの世界に  
来る―ということを示された。  
(ヨハネ14の15、16の5  
など)

このように、キリストがこら  
れた目的は、聖霊の重要性を  
世界に知らせるためであり、  
その聖霊を、キリストを信じ  
て求める人たちに与えるため  
であつた。

キリストが来られた目的とし  
て、第二に記されているのは、  
その名は「イエス」とせよと

言われたことのなかに含まれ  
ている。それは「民を罪から  
救うためである」との簡潔な  
表現にある。

さきに述べた聖霊が与えられ  
る―ということも、その前に、  
人間の根本問題としての罪か  
らの救い、罪の赦しがなけれ  
ば聖霊は与えられない。

この世界のいつさいの問題の  
根本にあるのは、正しいこと  
や愛の言動、真実な心、清い  
心等々がどうしてももてず、  
そこから離れてしまうという  
ことである。それを罪といっ  
ている。

その問題が解決されないかぎ  
り、人間はいかに科学や文化、  
あるいは経済的によくなつて  
も、心のなかに闇がある。

いつさいの問題の根源にあ  
る罪の赦し―そのためにイエ  
スは生まれてくださった、こ  
の地上にきてくださったので  
ある。

それが、イエスという名前に  
深く刻まれている。

さらに、第三に記されている  
こと、それは「その名はイン  
マヌエル」ということにある。

それは、ヘブル語で「神、わ  
れらと共にいます」という意  
味である。

キリストは人間の子として生  
まれた。しかし、死後は聖霊  
となり、神と同じ本質の存在  
となり、いまも私たちとともに  
おられる。

地上に生きておられるとき、  
思い病気や障がい悩む人、  
苦しむ人、死に瀕する人たち  
のところに赴かれて、いやさ  
れた。

そして悪をなす人たちを厳し  
く指摘して、ただされた。

現在も聖霊となつたキリスト  
は、私たちとともにいて、た  
とえいかなる状況におかれて  
も、私たちが心から求めると  
きにはその祈りに応えてくだ  
さる。応えがないと思われ  
る場合でも共にいてくださつて  
いる。

生きている間も、死後も永遠

にとともにいてくださる存在が  
キリストなのである。

## 内なるともし火

私は21歳の春までは、キリスト教というものに全く無縁であった。

その私が、キリスト者となったのは、キリストが十字架で死なれたのは、私たちの罪のゆえだった。その十字架を信じるだけで赦される、という福音の根本を知らされたときだった。

その福音の真理が私の魂に点火されて以来それは消えることなく現在も小さき火であっても燃え続けている。

神からの火をいただくときーそれはかつてモーセが荒野で見たように、燃えているのになくならない、という不思議なことが生じる。

人間世界では、人間の自分心の本性(罪)によって神からの火を消してしまうことが

よくある。

罪のない自然の世界には、神の直接の御手によって創造されたゆえに、神の火は燃え続けている。その夕焼けや星空の美、雲や青空の深みのある美しさ、野草の無数の変化ある美等々、それらは神の手からある種のもし火を受けて燃え続けている。

しかし、人間は自然の事物のようではない。人間的な感情や知らず知らずのうちに自分中心となったり、正しい道や言葉でなく、よくない言葉でだしたりすることもある。それでも、内なるともしびは燃えている。

地上のいかなる存在より、断然キリストが私にとつては第一であり、すべてである。

その小さな灯火があるからこそ、私は日曜日ごとの主日礼拝や、各地での家庭集会、県外各地での集会で福音を語る

ことが可能となってきた。「はこ舟」、「いのちの水」

と続いている福音伝道のための印刷物の継続も与えられてきた。

それもみな小さなともし火であつても、内に燃え続けるようにしてくださった神とキリストのおかげである。

内に燃えている真理のともし火が強く燃えているほど、その人の言葉にも表れる。

その人の言うこと、書いたもの、行動、表情、まなざし、声の調子等々に表れてくる。

日常的な言葉にも表れるが、文は人なりと言われるように、その人の書いたものによつても表れる。そして、そのともし火ー聖霊の火がもつとも完全な形で書かせるとき、それは聖書となつて、神の言葉とされるほどになった。

その火を永續させる力となるのは、福音の力である。

福音と関わりはあるが、福音そのものではないことに惹かれてキリスト教に近づきだけ

では、その火は燃え続けない。それでは、ともし火が燃え続けるためには、何が必要なのか。

はじめはキリストを信じていると言つていても、最終的には、キリストを捨てる人、そして捨てない人の違いについて、内村鑑三はつぎのように書いている。

… 国のためにキリストを信じた者は、ついにはキリストを捨てる。

社会人類のために、また、自分の教派を大きくするために信じた者、キリストの人格にあこがれて信じた者、あるいは、よき思想を得ようとして、また、艱難や苦痛を慰められようとしてキリストを信じた者も 最終的にはキリストを捨てる。

しかし、自分の罪を示され、その苦しみに耐えられず、「ああ、私は何とみじめな者なのか!」との声を発し、そ

こから、キリストの十字架を信じることよって神の前に正しいものとみなされる、という唯一の道を見いだし、その喜びにあふれてキリストを信じている者は、たとえ宇宙が消失することがあろうとも、永遠より永遠までキリストを捨てることはない。(原文は文語、「聖書之研究」一九一六年三月 岩波版内村鑑三全集 第22巻205頁)

ここには、キリスト教信仰の単純、しかも永遠の強さがある。学問や経験、あるいは多才、博識：等々いつさいは救いのためには必要ではないのはすぐにわかる。

力は神と結びついた単純から生じる。キリストは、幼な子のような者でなければ天の国に入ることはできない！という驚くべきことを言われた。

神は、人間がさまざまの弱さや置かれた状況があることをすべて見抜かれていた。そし

て、のようないかなる状況にあっても、真の幸いへの道はきわめて単純な道を備えてくたさった。

キリストの十字架、その一点によつて私たちは信仰のともし火を燃やし続けることができるようにしてくださっている。

救いはただ信じるだけ、一人で信じるだけでも与えられる。パウロもキリスト者を迫害していたとき、突然、復活のキリストの光を受け、その語りかけによつて救いを受けた。

キリストの弟子たちも、イエスのひと言「私に従ってきなさい」のひと言によつて、すべてを捨てる力が与えられ、救いに入れられた。

また、一人の女性は川岸の祈り場でたまたまパウロと出会つて、神の言葉がその内に

共同体としてのエクレシア(集会、教会)

入つてキリスト者となつた。このように、救いは、個人的に与えられていく。

けれども、ひとたび救いを与えられた者は、おのずから単独ではなくなる。

苦難において、どのように今から二千年も昔のキリスト者たちはそれを受け止め、耐え、乗り越えていったのであるうか。

その一端が、聖書に記されている。

使徒パウロは、ひどい迫害、圧迫のために、死を覚悟し、絶望的な状況となつたほどであつたが、そのようなとき、そのただなかで神の力が与えられ、救われたと記している。

神はあらゆる苦難において、私たちを励まし、慰めてくださる。それゆえに、神こそ賛美されますように！と、次のようにその手紙のはじめの部分で強調している。

神は、あらゆる苦難に際し

てわたしたちを励ましてくださるので(＊)、わたしたちも神からいただくこの慰めによつて、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができる。

(＊) 励まして…この箇所は、新共同訳では、「慰めてくださる」と訳されている。この原語は、パラクレシスで、パラ(そば) + カレオー(呼ぶ) すなわち、側で叫ぶ、はげます、慰める 等々の意味となる。英訳では、consolation(慰め) encourage(勇気づける) exhortation(強く勧める)、等々に訳されている。

例えば、…それを読んだ人は、その励まし によつて喜んだ。(使徒言行録15の31) … we were glad for its encouraging message. (NIV)

日本語においては、「慰める」というのと、「励ます」とではかなり大きな意味の違いがある。慰めの神 と、励ます神、いずれが原文の意味に近いといえるだろうか。

常に前進的な意味をたたえているキリスト教においては、単に慰めるという静的な意味

よりも、力づけるという積極的意味を持つている。

主イエスも、最後の夕食の終わりに、「勇気を出しなさい。私は世に勝利している」と言われたのもそうした意味である。

パウロは、もう死ぬほどであったという。それほど迫害のなかから神の救いを体験したと記している。(コリント1の10)

どのような人が、そのような困窮にあったパウロを助けたのだろうか。その一端は彼自身がローマの信徒への手紙の末尾で記している。

…教会の奉仕者でもある、わたしたちの姉妹フェベを紹介いたします。

どうか、聖なる者たちにふさわしく、また、主に結ばれている者らしく彼女を迎え入れ、あなたがたの助けを必要とするなら、どんなことでも助けにあげてください。彼女は多くの人々の援助者、特にわた

しの援助者です。

キリスト・イエスに結ばれてわたしの協力者となっている、プリスカとアクラによるしく。命がけでわたしの命を守ってくれたこの人たちに、わたしだけでなく、異邦人のすべての教会が感謝しています。(ローマの信徒への手紙16の1〜4)

プリスカとアクラというのは夫婦であって、ここでは、妻のプリスカが夫よりも先にあげられている。ほかにも新約聖書では何度かこの夫婦は表れるが、妻のほうが先にあげられていることが多いのも、女性であつても、命がけでパウロの命を守ったほどの主にある勇気が与えられていたのがうかがえる。

そして第一に名前のあげられたフェベという女性も、多くのキリスト者たちを助け、ときにパウロを援助したことが記されており、バルナバやテモテ、テトスといった男性の

同労者だけでなく、こうした女性たちの献身的な働きによつても、パウロの伝道はささえられていたのがうかがえる。

これらの人たちだけでなく、多くの人名が、ローマの信徒への手紙の最後の部分にあげられていて、そのなかに、「主のために苦勞して働いているトリファイナ、主のために非常に苦勞した愛するペルシス…」といった記述もあり、迫害も受けるような危険な状態のパウロや福音のために、多くの真剣な苦勞がなされていたのがわかる。そうした共同体によつて福音はローマ帝国の広大な地域に驚くほどの短期間で伝わって言ったのである。

突き放されたところからの叫びと救いー詩篇第60篇

き放し

怒って我らを散らされた。どうか我らを立ち帰らせてください。

4 あなたは大地を揺るがせ、打ち砕かれた。

どうか砕かれたところを癒してください

大地は動揺しています。

5 あなたは御自分の民に辛苦を思い知らせ

よるめき倒れるほど、辛苦の酒を飲ませられた。

6 あなたを畏れる人に対してそれを警告とし

真理を前にしてその警告を受け入れるようにされた。

7 あなたの愛する人々が助け出されるように

右の御手でお救いください。それを我らへの答えとしてください。

8 神は聖所から宣言された。わたしは喜び勇んでシケムを分配しよう。スコトの野を測量しよう。

9 ギレアドはわたしのもの

マナセもわたしのもの

3 神よ、あなたは我らを突

エフライムはわたしの頭の兜  
ユダはわたしの采配

10 モアブはわたしのたらい。  
エドムにわたしの履物を投げ  
ペリシテにわたしの叫びを響  
かせよう。」

11 包囲された町に 誰がわ  
たしを導いてくれるのか。エ  
ドムに、誰がわたしを先導し  
てくれるのか。

12 神よ、あなたは我らを突  
き放されたのか。神よ、あな  
たは 我らと共に出陣してく  
ださらないのか。

13 どうか我らを助け、敵か  
らお救いください。  
人間の与える救いはむなし  
いものです。

14 神と共に我らは力を振る  
います。  
神が敵を踏みにじってください  
います。

この詩は少しわかりにくく、  
さらに私たちの知らない地名  
がいろいろと出てくるので、  
私たちには関係のないように

思われやすいが、それだから  
こそ、なぜこういう詩が聖書  
に神の言葉として記されてい  
るのかを考えつつ読みたい。

この詩は非常に厳しい戦いの  
中に置かれていたことが12節  
以降からうかがえる。個人的  
な苦しみを言ってる詩ではな  
く、イスラエル全体が危機的  
な状況で、敵が間近に迫って  
きていて救ってくださいと必  
死に祈らずにはいられないよ  
うな状況である。

この詩のはじめの部分には、  
「神が私たちを突き放された」と  
記されている。敵から攻撃  
されて滅ぼされようとしてい  
るのに、それを通常私たちが  
考えがちな、作戦が悪かった  
とかリーダーの考え方が間違っ  
ていたというように受けとっ  
ていない。

太平洋戦争でも、敗戦の要因  
となったのは、天皇や軍部、  
政治家たちなど指導的立場の  
人たちの判断が間違っていた  
からだと言われるが、それは、

あの戦争のいきさつを知らば  
ごく当然のことである。

しかし詩篇の作者においては  
さらにそうした指導者たちの  
誤りの背後に、神が突き放さ  
れたのだ、と示されたのであ  
った。

だからこそ神に祈っている。  
どうしてこのように突き放さ  
れたのかというと、この詩に  
は書いていないが、他の多く  
の詩では神に信頼をしていな  
かったから、または他の偶像  
的なものに信頼していたなど、  
人間的なものに信頼をしてい  
るからというのがしばしば出  
てくる。

自分たちの国が引き裂かれ、  
大地を揺るがせるほどに、神  
が大きな力を加えて、神の民  
が突き放されて散らされたと  
ある。それは確かに何らかの  
罪があつたということを考え  
られる。罪の裁きということ  
だけではなく、6節にあるよ  
うにこの非常な苦しみは警告  
するためたとある。神はどん

なことでもできる。敵の軍隊  
をも命令通り動かすことがで  
きる。

自分たちが非常な苦しみを味  
わったのは、敵の攻撃のゆえ  
であるが、その背後には、いつ  
さいを見つめておられる神の  
許可があつたのだと知らされ  
たのである。

太平洋戦争のときには、アメ  
リカやイギリスに対して、鬼  
畜米英と言うののしりを浴び  
せることを、国家の指導者が  
先導して国民に言わせるよう  
なやりかたをしていた。

しかし、当時のそうした指導  
者や国民の大多数には、そう  
した戦争による苦難は、神が  
日本の罪ゆえに神があたえた  
大いなる試練であつたという  
受け止め方はなかつた。

この詩は、いろいろななじみ  
のない地名などが現れ、現代  
の私たちには縁遠いような感  
じがするが、この詩の内部に  
込められた真理は、現代の私  
たちにも通じるものを持つて

いる。

私たちもひどい苦しみに遭遇したときには、直接関係のある人間のせいに行ったり、敵視したり憎んだりしがちである。しかし、この苦しみは神が与えたことである。自分たちが罪を忘れて、自分は正しいなどと思い込むと、神はその大いなる力でもって私たちを突き放す。このようなことを学ぶために苦しい経験があると、

苦しい出来事の背後に、神がおられることを思い起こすようにとさし示している。

神と自分との関係に思いを深めるとき、私たちの苦しみに関して、他人が〇〇をしたからだ、といった他人のせいにするという考え方から脱却することが可能となる。

神がいつさいの出来事の背後でおられるからこそ、そうした苦難のときにも、みずからの罪を知り、そこからどうか救ってくださいと願うのである。

そうした切実な祈りの結果はどうなるか、それが8節に記されている。これは敵が攻めてきた危機的な状況からみたら、どうも関係なさそうに見えるが、そうではない。

8、9節の地名はヨルダン川の両側にある。そこに住む民は神がしっかりとらえていると言っている。だから敵が神の領域を侵すことはできないと言っているのである。

そして、10節は絶えずイスラエルに敵対してきた地名があがっている。エドムにわたしの履物を投げるなど、非常に特異な表現で、詩的な直感というのには独自にひらめくものなので、普通の人には思いもよらない表現で示されている。モアブという国が敵対しようとする武力などは、汚れたものを洗うときに使うたらいのようなもので、なんでもないのである。

同様に、エドムという国も、履物を投げるような何の力も

脅威もない。長く敵対しているペリシテ国も大いなる声で威圧するだけでその力は失せるほど取るに足らないものにはすぎない。

このように、追い詰められて神から見放されたような状況で必死に祈ったら、何を恐れるのか、おまえたちの住むところは全て私のもので全て守っていて、敵の力は取るに足らないということの特異な表現で言っている。

今の私たちにこのような地名を使って言われてもどうもピンとこないが、当時の人から見たら、非常に生き生きと伝わってきた。

しかし、他方では、このように神の力の大きさと敵対する勢力の力など恐れる必要はないという御声を聞いたにもかかわらず、人々はこれによつてさえも十分に確信を持つことができなかった。この詩ではこのように絶えず神の声を

聞きながら恐れと闘う姿がうかがえる。

しかし時が来たら最後には神の声を聞き取り、非常に厳しい現実のただ中であつても神の声がしみ通って14節のように神への信頼をもつて終わっている。

最初と最後は対照的である。絶望的な状況から、神の声を聞くということが転換点となり、様々な波、動揺もありながら、神と共に力を振るうことができ、神が悪の力を滅ぼしてくださるといふ確信で終わっている。

現代の私たちにおいても、数々の悪しき出来事に悩まされ、苦しめられる。神が私たちを見放したのかーと思われるほどのことが次々と起こる。

しかし、そうしたなかで神の声に聞き、あらたな力を与えられ、いかなるこの世の悪であつても、最終的には、神がそうした悪の力に勝利してく



ださるのを信じる道が開かれている。

私たちの敵とは、具体的な人間や組織ではなく、真実や愛を踏みじろつとする悪しき人のうちに宿る悪そのものである。

…私たちの戦いは、血肉を相手にすることもでなく、…悪の諸霊である。(エペソ書6の12)

そのような悪そのものが滅ばされるときには、そうした悪に動かされて悪しき言動をしている人たちも、新しい人にされる。

現代の私たちにとつて、そのように祈ることが求められており、それがキリストの言われた、敵を愛し、その迫害するもののために祈れーということの意味だと知らされる。

私たちは、病気や事故、あるいは自分の罪ゆえ、また災害や事件などによって、いかにしても助けが与えられない、神が私たちを突き放し、滅ぼそうとしているのではないの

かーと思われるほどのことに遭遇することがある。

はるかな昔から現代にいたるまで、そのような状況に置かれている人たちは数知れない。そのような状況にあつて、いかに神に向うのかーその深い苦しみと悲しみ、あるいは絶望からの叫びと祈りがここに

## 星の世界

早朝5時ごろに起床して、東の空のよく見えるところへと出ていった。まだ大空は全くの間であつてそこには、満天の星があつた。

やや西よりの南の空には、シリウス、プロキオン、ベテルギウス、双子座のカストルとポルクス、御者座のカペラ、牡牛座のアルデバラン、等々が、大きな円状に、目を見張るばかりに輝いていた。

東に目を向ければ、低い東の空には、金星があり、その左

上方にはアークトゥルス、右上方には、乙女座のスピカ、さらに右上には、しし座の一等星レグルスが輝いていた。

いまから、三七〇〇年ほども昔、神はアブラハムに語りかけた。

あなたの子孫は星のようになると。単にテントの中とか、日中のどこかで語りかけるのではなく、夜中にしかもテントの外に出て見よ、と言われた。そして、見渡すかぎりの夜空に星が無数の輝きをちりばめていた。

そのようにアブラハムの子孫は無数にひろがるといわれた。しかもそれは単に数がそのよ

うに増えるというのでない。その星の輝きは永遠的であり、いかなるものによつても汚されない。人間のさまざまの思惑や思想、欲望、妬み、怒り、憎しみ、あるいは悲しみや絶望等々、あらゆる人間的なものによつていかなる変化も起こさないほどの不動の安定した輝きなのである。

た輝きなのである。

そのような星々にあつて、一段と早朝の東空に明けの明星たる金星の輝きがあつた。

古来、この星の光の強さは広く知られていた。そしていつもは見ることはできず、特定の期間のみ現れる。明け方や夕方にしかみられない、といった特異性がある。

とくに明けの明星としての金星は、夜明け前、闇の中にあるとき一段と強い輝きで現れ、だれの目にも特別な星として感じられるであろう。

二千年前のキリスト者にとつても同じだった。苦難のなか、迫害により礼拝に集まることも困難な状況は随所に生じていったであろうが、そうした時、まだ暗いうちから集会のために足を急がせるキリスト者にとつて、明けの明星の姿は、そのまま再臨のキリストとなつて浮かびあがつてきたのである。

私たちも、この地上には実にさまざまの、それぞれの人、家庭、そして国全体が戦争や

混乱のただなかにあるところもあり、それぞれに異なる重荷があり、悲しみや苦しみがあ

る。そのような闇と困難のなかに、光を注いでくださるもの―それがキリストである。とくにこの世全体の悪の力を滅ぼす

ために来られるキリストを待ち望むのは自然のことである。星のようにひるがる―その永遠の光をたたえて、しかもそれはかぎりなく広がって数を増していくという預言。それは彼らが与えられている信仰であり、さらに神の言葉であり、生きて働くキリストであり、うちにすみ続けるキリストであり、聖霊である。

…あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星のようにこの世に輝いている。(ピリピ書2の15)

アブラハムの子孫が星のように増える―あの星のように永

遠の光を輝かせつつ、しかもふえていくという。なぜか、それは、神の言葉が彼らに宿っているからである。神の言葉は神ご自身のご意志であり、神でもあるとさえ言われている。

また、星々は万軍の主という言葉にも含まれている。万軍と訳された原語は、万象とも軍とも訳される。あの広大な夜空に無数にきらめく星々は目にみえる天使とも言われるが、それらもまた、神が悪とたたかうための戦士だとみなされているゆえに、それらの星々全体が神の軍勢なのだという考えがある。

神は夜ごにこうした大空全体に、そのみえる戦士たちをちりばめ、人間に、壮大な神の霊的な軍を示しているといえる。

星は神秘的であり、何にも増して清い、そして永遠である。しかしそれだけでなく、その

ような星々がこの世界をつねにおびやかしている悪の力との戦いの霊的な天使であると信じることも与えられており、それは夜ごとに見る星からの意味深いメッセージともなる。

### お知らせ

○元旦礼拝…一月一日午前6時30分～8時

新しい年を迎えて、ともに祈り、御言葉と聖霊を受けたいと願っています。

### ○冬季聖書集会

・主催：キリスト教独立伝道会

毎年一月に、横浜市郊外の森の家に開催されています。以下、伝道会から送られてきた案内です。

……  
…イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。」

わたしを信じる者は、死んでも生きる。

生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ11の25～26)

「このことを信じるか」とイエス様は問いかけます。

日々の生活が辛く、苦しくても、希望があります。寿命はせいぜい100年ですが、復活の命は永遠です。

冬期集会でみ言葉に満たされ、復活の希望が確かなものになることを願っています。

皆様のご参加をお待ちしています。聖書を読んだことのない方も是非誘ってください。

日時：2018年1月6日(土)

13:30受付 14:00開会

8日(月)13:00解散

会場 上郷(かみごう)森の家

横浜市栄区上郷町1-99-1

TEL045-895-5151

講師 吉村孝雄氏

1945年生まれ。1967年1冊の本からキリスト教信仰を与えられる。徳島聖書キリスト教会代表として働くが、1994年教職を辞し福音伝道に専念。「祈りの友」代表。月刊「いのちの水」誌主筆。

会費 大人19,000円 学生5,000円 日帰り参加1,000円 /日+食事代

食事は、昼食は800円程度、夕食は2,400円です。

参加費は、当日受付でお支払いください。

\* お申し込み後のキャンセルは、後日、キャンセル料を戴きます。

・申込締切: 2017年12月16日(土)

お問合せ・申込先: キリス

ト教独立伝道会事務局 小館知

子 〒226-0016 横浜市緑区

霧が丘3-22-1-501

携帯電話 090-7183-1214

FAX 045-489-9026

「メールアドレス

Kodatetomoko@gmail.com

○時間がとれなくて、今月の集会だよりは、「いのちの水」誌に組み込むことになりました。

○この一年、多くの方々から、お祈りや、いろいろと協力費やお手紙その他をお送りくださいましたこと、ありがとうございます。ありがとうございました。そうしたことによって私も支えられて日曜日やその他の家庭集会、そして県外の各地での集會も与えられています。

また、そうした手紙その他に閉して、返信などできないことが多く申し訳ないことですが、おゆるしくください。

○「野の花」文集、余分を希望される方は、一冊送料込で三〇〇円です。代金は「いのちの水」誌の末尾の郵便振替、または二〇〇円以下の少額切手(古いものでも可です)でお送りください。

○よきクリスマスと新しい年の祝福を、そしてこの闇と混乱の世界のただなかにキリストの光が射し込むようにと祈ります。

徳島聖書キリスト集會案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分

(二) 夕拝 第一火曜と第三火曜。夜7時30分から。 毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町のちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中川

宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて開催)です。

・水曜集会: 第二水曜日午後一時から集會場にて。 北島集会: 板野郡北島町の戸川宅(第二、第四月曜日午後一時より。北島夕拝は第二水曜日夜七時三十分より)

・天宝堂集会: 徳島市心神町の天宝堂はり治療院(網野宅)、毎月第二金曜日午後8時。

・海陽集会、海部郡海陽町の讚美堂・数度宅(第二火曜日午前十時より)、

いのちのさと集會: 徳島市国府町(毎月第一木曜日午後七時三十分より)「いのちのさと」作業所、

・藍住集會: 第二月曜日の午前十時より板野郡藍住町の美容サロン・ルカ(笠原宅)、

・小羊集會: 徳島市南島田町の鈴木八里治療院にて。 毎月第一月曜午後一時。 ・つゆ草集會: 毎月第4日曜日午後一時半。

徳島大学病院8階個室での集まり。 ・第四土曜日の午後二時からの手話と植物、聖書の会、問い合わせは左記へ。

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意) 郵便振替口座 〇一六三〇一五五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集會 協力費は、郵便振替口座が定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。(これは、いずれも郵1便局で扱っています) E-mail: pististty12@hotmail.com http://pistis.jp (検索は「徳島聖書キリスト集會」)